

姫路城城下町跡

— 姫路城跡第374次発掘調査報告書 —

2018

姫路市教育委員会

序

姫路城は本市の象徴であるとともに、我が国を代表する文化遺産の一つです。江戸時代のはじめに池田輝政によって五重六階、地下一階の連立式天守が築かれて以来、400年を経た今も威容を誇っています。姫路城下町は、天守のある姫山を中心に螺旋状に巡らされた三重の堀によって、天守をはじめ城の中核の置かれた内曲輪、武家屋敷が立ち並んだ中曲輪、町人地・寺社を中心とした外曲輪に区分されています。このうち内曲輪・中曲輪の大半が世界遺産及び国の特別史跡として登録・指定され保護・顕彰が図られております。

一方、町人地を中心とする外曲輪は、江戸時代以来、姫路の経済の中心地として発展し、現在も播磨の中核都市に相応しいまちづくりが進められています。今回調査を行った古二階町は、戦後の土地区画整理により町域が大きく再編され、江戸時代の武家地と町人地であった茶町が含まれることとなりました。そのため、地中には武家屋敷の様々な施設や町家の生活痕跡が残されていました。姫路城下町では先の大戦により武家屋敷地をはじめ多くの貴重な文化財が失われました。見つかった遺構・遺物は姫路城下町の古き姿を伝えるものであり、ここにその調査成果を報告し姫路城跡の調査・研究の進展に資する所存であります。

最後に事業実施にあたり、多大なご協力を賜りましたサンヨーホームズ株式会社、その他関係者各位に心から御礼申し上げます。

平成30年(2018年)3月31日

姫路市教育委員会
教育長 中杉 隆夫

例 言

1. 本書は姫路市がサンヨーホームズ株式会社の委託を受け、姫路市古二階町7番において実施した姫路城城下町跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の実施ならびに本報告書の刊行に際しては、サンヨーホームズ株式会社に多大なるご協力を頂いた。また、現地作業では株式会社島田組にご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。
3. 現地調査及び整理作業、報告書の編集は、姫路市教育委員会 生涯学習部 埋蔵文化財センターが実施した。現地調査開始から整理作業終了までの体制は次頁のとおりである。
4. 発掘調査で得られた出土遺物、図面、写真等は姫路市埋蔵文化財センターにおいて保管している。
5. 発掘調査・出土品整理および報告書作成においては、下記の方々・機関より御協力・御教示を賜った。深く感謝の意を表したい。(敬称略、五十音順)

上原真人、工藤茂博、田中哲雄、福田剛史、古二階町自治会、姫路市立城郭研究室、姫路市史編纂室

凡 例

1. 近世姫路城跡は、文化財保護法により「特別史跡姫路城跡」と周知の埋蔵文化財包蔵地である「姫路城城下町跡」に区別されている。調査回数については、これを区別せず「姫路城跡第〇次」としている。また、江戸時代の城下町についての言及には「姫路城下町」を使用している。
2. 遺構名の表記は、文化庁文化財部記念物課監修の『発掘調査のてびき』記載の略号を使用した。報告書の記載上、遺構の性格が明らかな場合は屋敷境、井戸等と表記した。遺構名は遺構面毎に1番から番号を付した。2面目で検出した遺構については2-遺構名と記載している。
3. 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位は全て座標北である。標高は、東京湾平均海面(T.P.)を使用した。
4. 土層注記に用いた色調は『新版 標準土色帳』(1999年度版)に準拠している。
5. 本書で用いる分類名・土器編年および年代観は次の文献によっている。

肥前陶器・磁器：九州近世陶磁学会事務局 2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会、備前焼：乗岡実 2000「備前焼挿鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会、丹波焼：長谷川真 2006「近世丹波焼の諸相」『江戸時代のやきもの―生産と流通―』(財)瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター、焙烙：中川猛 2012「焙烙考―姫路と周辺の焙烙―」『山口大学考古学論集Ⅱ』中村友博先生退官記念論集作成委員会、土師器皿：森恒裕 1991「淳心学院出土遺物の検討―16世紀後半から17世紀初頭における姫路城下町の様相に関する予察―」『城郭研究室年報』Vol.1 姫路市立城郭研究室

図出展 図2 姫路市 1986 『姫路市史』第10巻 史料編 近世1 付図2-1

図3 姫路市 1996 『姫路市史』第11巻上 史料編 近世2 付図3-1

目 次

序

例 言・凡 例

目 次

第Ⅰ章	調査に至る経緯と経過	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	1
第Ⅱ章	遺跡の立地と環境	2
第Ⅲ章	調査の結果	3
第1節	調査区の層序	3
第2節	街路跡の調査	3
第3節	江戸時代後半の調査	4
第4節	江戸時代前半の調査	6
第5節	江戸時代以前の調査	8
第Ⅳ章	総括	9

写真図版

発掘調査の体制

姫路市教育委員会

教 育 長 中杉隆夫

教育次長 名村哲哉

生涯学習部

部 長 岡田俊勝

文化財課

課 長 花幡和宏

課長補佐 大谷輝彦【調整】

技 師 黒田祐介【調整】

埋蔵文化財センター

館 長 前田光則

課長補佐 岡崎政俊

係 長 森 恒裕

技術主任 小柴治子

福井 優

中川 猛【調査・整理】

南 憲和

関 梓

主 事 岡本武平

技 師 補 山下大輝

嘱託職員 韋美紗、黒岩紀子、清水聖子、田中章子

玉越綾子、野村知子、松田聡子、三輪悠代

臨時職員 鈴木千枝美、宅見春美、寺本祐子、長谷川鈴代

藤村由紀

第 I 章 調査に至る経緯と経過

第 1 節 調査に至る経緯

姫路市古二階町7番においてサンヨーホームズ株式会社による集合住宅の建設工事が計画された。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡（遺跡番号：020169）に所在する。

平成28年10月24日付でサンヨーホームズ株式会社より文化財保護法第93条に基づく届出が姫路市教育委員会宛であった。届出の内容に基づいて協議を行い、平成28年12月1日～3日にかけて敷地内の5箇所で遺構の残存状況を把握するため確認調査（姫路城跡第367次）を実施した。調査の結果、既存建物部分に設定した調査区を除き遺構・遺物が確認できたことから、工事により遺構面が影響を受ける範囲の取り扱い協議を行った。協議の結果、遺構の保存が困難な部分の記録保存を図るため本発掘調査を実施することとなった。平成28年12月26日付兵庫県教育委員会からの通知に基づいて、平成29年2月27日付で姫路市と事業者とで協定を締結し、対象となる範囲の本発掘調査を開始した。調査にあたっては、南側の旧武家屋敷を1区、北側の旧茶町の町屋を2区とした。調査面積は751㎡、遺構面は2面である。

第 2 節 調査の経過

1区については、残土置場の関係から中央部分で二分割し、施工した。調査は基本的にバックホウで盛土・造成土・攪乱土を除去した後、以下は人力で掘削し、遺構検出及び検出した遺構の発掘を行った。

調査は平成29年3月7日に1区北部から開始した。礎石の遺存状態が良好であったため、機械による盛土掘削は最小限に留め、人力により礎石の検出に努めた。遺構発掘の進展に伴い適宜、記録写真撮影、遺構実測を実施した。3月29日には遺構の発掘を終え全景写真を撮影した。その後、空中写真測量を行い2面目の調査を開始した。江戸時代前半の遺構及び中世の溝等を調査し、4月18日に全景写真を撮影した。埋戻し後、4月21日から1区南部の盛土除去を開始した。直後に街路を良好な状態で確認し、順次遺構の調査を進めた。5月19日に1面目の全景写真、空中写真測量を行った。引き続き2面目の調査に移行するとともに、平行して2区の調査を開始した。5月30日に報道機関に街路遺構と江戸時代以前の遺構についての調査成果を発表し、6月3日に現地説明会を行った。6月15日には1区南部・2区を合わせて全景写真・空中写真測量を行った。その後、必要な断割り調査や埋戻しを行い、6月17日に現地での調査を終えた。

現地調査終了後、埋蔵文化財センターにおいて引き続き整理作業を実施した。整理作業と並行して報告書を作成し、本書の刊行をもって当該地における全ての調査が完了した。

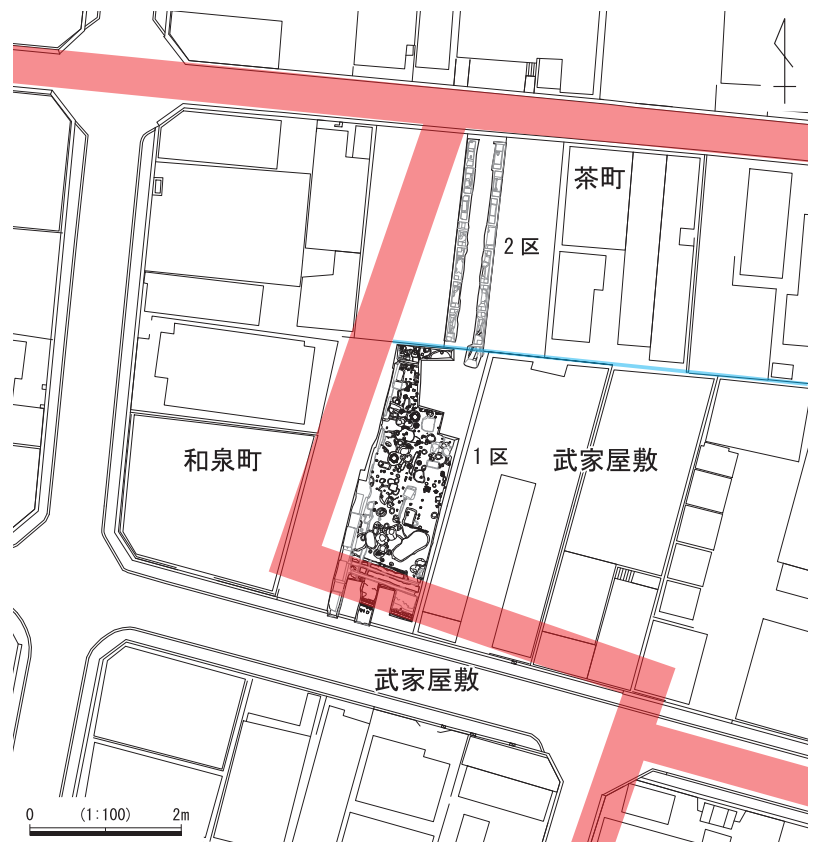


図 1 調査地街路想定図

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

姫路城城下町跡は、姫路市域を南北に貫く市川と夢前川によって形成された沖積平野のほぼ中央に立地する。姫路平野には古代より東西交通の要である山陽道が通り、更に東へは丹波、有馬方面へ、西へは美作あるいは因幡へと街道が延びている。南には瀬戸内海航路が存在するなど陸海の交通の要衝であった。こうした地理的要因を背景として近世姫路城は成立した。近世姫路城は池田輝政により、慶長6年から同14年までかけて平野部と独立丘陵である姫山・鷲山を利用して築かれた平山城である。丘陵部の標高は約50m、平野部は11～15mを測る。市川の支流である船場川を西限とし、姫山・鷲山を囲うように内曲輪、中曲輪、外曲輪と縄張りされている。

調査地は外曲輪に位置する。現在の町名は古二階町であるが、江戸時代に古二階町と呼ばれた町域は調査地の一つ北の筋である。附近は戦後の土地区画整理により再編されており、調査地は江戸時代には茶町と武家屋敷とにまたがっていた。姫路城下町の建設にあたっては複数の都市軸が使用されたと想定されている。調査地周辺にはN5°Eの総社ラインとN21°Eの条里ラインとが存在する⁽¹⁾。調査地のうち1区が条里ラインで、2区が総社ラインに沿っている。本調査区は2つのラインをまたいでおり、考古学的にこの地割りを検証することのできる場所に位置している。調査地は図1に示すように1区が武家屋敷、2区が町屋の茶町にあたる。武家地と茶町の境は1区と2区の間と考えられ、現在の背割の位置と大きくずれていないと想定される。また、調査地には江戸時代に「L」状に曲がる街路があったが、区画整理により付け替えられた。街路のうち、南北方向に延びる部分は、既存建物により遺存しておらず厳密な位置は特定できないが図1に想定したように1区の西側に想定できる。調査では東西方向の一部のみを確認することができた。

街路に面して武家屋敷が配置されていた。図2に示す第一次榊原氏時代の「姫路御城廻侍屋敷新絵図」(1649～1667)にはこの街区が描かれている。この時期には、東西街路の端から端までが一軒の屋敷地として描かれており、500坪ほどの屋敷地であったと想定される。第二次榊原氏時代の宝永八年(1711)の絵図では2軒に分かれ、図3の18世紀後半に描かれた酒井氏時代の「姫路侍屋敷図」では更に分割が進み3軒となっている。この分割に伴って敷地形状は東西に長い形状から南北に長い形状に変化する。酒井氏時代には、1区に該当する武家地の敷地面積は概ね100～150坪とみられる。現存する武家屋敷の遺構と比較すれば、その規模は鷹匠町に残る屋敷地と同程度と推測される⁽²⁾。こうした屋敷地は「官舎」であるため、住人は頻繁に入れ替わっている。調査地の住人について一例をあげれば、図3に示す絵図の住人は「斎田善右衛門」である。文化三年(1806)の絵図では「斎田藤蔵」となっている。これは善右衛門が天明六年(1786)に藤蔵と改名したことによる。これらの絵図から少なくとも18世紀後半から19世紀初頭までは斎田家が調査地の住人であったことがわかる。なお、「酒井家家臣録」によれば斎田善右衛門は、盗賊の捕縛や台風時の侍屋敷の見回り、稲の検分、会計方等を勤めたことが記されている。19世紀初頭以後の同家の行方は明らかではないが、後述する江戸時代後半の遺構の一部については、斎田家の人々が使用したものと推測される。

2区の茶町は、姫路城下町を構成する町の一つである。『姫路市町名字考』によれば「茶町」の名は茶屋があったことに由来し、もとの辺を「高尾」といったと記されている⁽³⁾。調査地付近は古二階町、元塩町等の町名から、近世城下町建設以前の町場の存在が想定されている。前身となる町場があったかどうかは不明であるが、茶町自体は池田輝政による町割りによって成立したと考えられ、図2の絵図から遅くとも17世紀前半には町として整えられていたと見られる。「姫路町明細書上帳」によれば家数は72軒とある⁽⁴⁾。

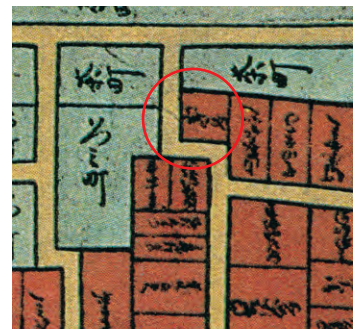


図2 「姫路御城廻侍屋敷新絵図」

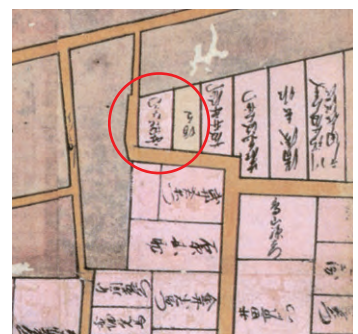


図3 「姫路侍屋敷図」

第三章 調査の結果

第1節 調査区の層序

調査区の基本層序は、盛土・近現代整地層、近世整地層、中世耕土層を経て、地山に至る（図7）。地山の標高は1区で概ね12.2m、2区で概ね12.3mを測る。1区については、調査区北部のみ中世耕土層が残存していたが、南部では中世耕土層は確認できず、江戸時代の整地層の直下で地山を確認した。整地層は1区東壁の7～10層が該当し、そのうち10層が層序的に中世耕土層と対応する位置にある。そのため、10層ないし中世耕土層の上面を第1面とし、その下位の地山面を第2面として調査を行った。2区については既存建物の攪乱を受けており、破壊を免れた基礎と基礎の間で遺構を確認した。

第2節 街路跡の調査（写真図版3）

調査地は戦後の土地区画整理により再編された地域であるため、街路の付け替えが行われている。調査では区画整理によって埋められた東西方向に伸びる街路部分を検出した。近現代の埋設管に伴う攪乱を受けている以外は良好な状態で遺存していた。街路は第1面で検出したが、複数回の造り変えが認められることから段階ごとに街路面を検出し調査を行った。

街路跡（図9） 南側に間知石積みの側溝を有し、北側は築地基礎とみられる延石で区画されていた。延石の下位には素掘りの溝が確認でき、延石に先行する何らかの区画施設がほぼ同位置にあったことがわかる。街路の規模は、延石と間知石側溝内法で5.5m、路面幅は5.2m、側溝幅は約30cm、深さ60cmである。街路はいわゆる「砂利道」で、攪乱部分を除き全面に砂利による舗装が認められる。断面観察から大きく8層に分層でき、少なくとも3時期の造り替えが認められる。下から第1路面、第2路面、第3路面と呼称する。



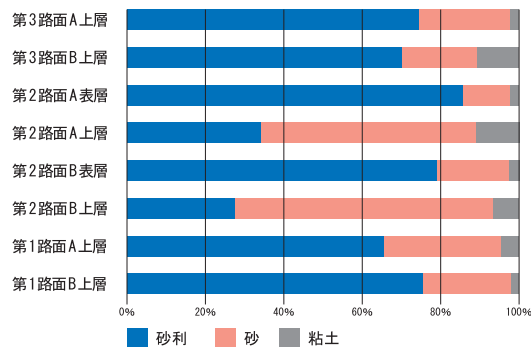
図4 街路表層検出写真

街路の断面（図9） 姫路城城下町跡の街路構造は基本的に上層と下層からなり、上層の最上面が表層＝路面にあたる。図4にみるように表層は上層の一部であり、小砂利を叩き締めたもので、当時の人々が歩いた面である。今回の調査で検出した街路を土層断面に基づき説明すると、第3路面は1層と2層が該当する。1層が上層にあたり層厚は4cm、2層が下層にあたり層厚は10cmである。その下位に3層があり、第2路面を被覆している。第2路面は5層・6層・7層で構成される。5層が上層にあたり層厚は3cm、6層と7層が下層にあたり、層厚はそれぞれ概ね6cmである。部分的に6層と7層の境に硬くしまった砂利が確認できる箇所もあることから、6層と7層の間に別の路面が存在していた可能性もある。第2路面には第1路面を掘り込む2-SD201が伴う。溝は素掘りで街路と平行し、延長9.5m、幅約50cm、深さは概ね10cmを測る。溝の上面を第2路面の下層が覆っていることから、第1路面に伴う遺構と考えることもできるが、第1路面表層にはこの溝による崩れた痕跡がないことから第1路面の機能時ではなく、第2路面を構築する際の遺構と判断した。溝の埋土は9層と10層であるが、しまりの弱い砂で埋まっていることから暗渠として機能していた可能性を考えている。第1路面は地山である砂礫層の直上に構築され、上層と考えられる13層のみで構築されている。厚さは1～2cmである。第1路面の検出レベルと地山の検出レベルとを比較すると第1路面が低く、地山を掘り込んで構築されたものであることがわかる。側溝側に緩やかな勾配を有している。姫路城城下町跡の街路は基本的に地山上に盛土によって構築しており、地山を削り込んだ例は本例が初見となる。

路面の時期（図10） 第3路面については直上に戦災焼土を含む盛土がある点、側溝に現代のガラス片等を含むことから区画整理直前まで使用されていた路面であろう。第2路面は舗装中に含まれる遺物の細片、溝内から出土した遺物から幕末頃に構築された路面と考えられる。第1路面は地山上面に構築しているが、写真に示したように明確に時期を特定できる遺物は出土していない。しかし、江戸時代前半に遡る遺物も含んでいないことから第2路面

構築以前の18世紀後半頃に構築されたものと考えられる。以上のとおり検出した街路には、江戸時代前半の路面は存在していないことが判明した。しかし、後述する江戸時代前半の武家屋敷内における遺構配置や絵図の描写を参考にすれば、街路は江戸時代前半から同一場所にあったと考えられる。伽屋町における第354次調査の成果から街路舗装は江戸時代前半から行われていることがわかっている⁽⁵⁾。このことから土層断面では確認できないものの、第1路面は同一場所で何度か造り変えが行われている可能性を指摘できる。その際、片側溝であるため南側へ勾配をつける必要から地山を掘り込むこととなったものであろう。街路側溝については、間知石を使用していることから近代になって造り直されたもので、江戸時代の状態を保ったものではない。しかし、調査区内では街路側溝の改修を示す遺構は検出できないことから、街路側溝も江戸時代を通じて同位置に築かれていたと考えられる。

街路の舗装 (図4・5・9) 街路舗装のうち、下層については基本的に礫の含有が少なく、硬く締まらない柔構造をとっている。上層はこれに対して砂礫を含む層で硬く締まっている。右表は街路上のA・B2地点において各面の表層もしくは上層とを30cm角でそれぞれサンプル採取し、それぞれの構築材の内訳を示したものである⁽⁶⁾。これによれば、いずれの路面でもその構成比は概ね近似し、かつ同一面においては両地点で構成比はほぼ共通している。このことから今回の調査地では、砂利、砂、粘土の構成比率は時期にかかわらず、ほぼ一定であったといえる。一方、伽屋町の街路では時代が新しくなるにつれ、砂利の比率が増加していく傾向が読み取れた⁽⁷⁾。本街路ではそうした傾向は読み取れず、伽屋町で17世紀後半～18世紀前半に比定した第2路面よりも総じて砂利の比率が高い。このことは前述した路面の時期比定とも整合し、総じて江戸時代後半以後の路面であることを裏付ける。



サンプル地点	砂利 (g)	砂 (g)	粘土 (g)
第3路面A地点上層	669.84	208.35	19.99
第3路面B地点上層	467.46	126.13	71.00
第2路面A地点表層	865.35	122.04	20.61
第2路面A地点上層	999.53	1589.2	313.49
第2路面B地点表層	742.82	171.71	23.47
第2路面B地点上層	389.79	934.7	91.39
第1路面A地点上層	396.58	181.83	27.34
第1路面B地点上層	841.7	250.96	21.54

図5 街路構築材組成表

街路と屋敷地 (図8・9) 街路に面して、両側に武家屋敷が存在するが、南側の武家屋敷地では近現代の延石とほぼ同位置で礎石を検出した。調査面積の関係から詳細は不明であるが、これらの礎石は築地や塀に伴うとは考えにくく、街路に面した門等の施設を想定できる。なお、門については、確実な遺構としては未だ発掘例はないが、現存する下級武家屋敷の建物遺構は全て腕木門式とされる⁽⁸⁾。北側の武家屋敷地では後述するように建物と街路との間に土坑が掘られ、街路に近接した位置にある2-SK208では犬が埋葬されるなど、屋敷地の空間構成からは敷地南側に街路に面した入口を想定することは困難である。このことから江戸時代を通じて入口は東西方向の街路に面した敷地南側ではなく、南北方向の街路側に面した敷地東部に設けられていたと考えられる。

第3節 江戸時代後半の調査 (写真図版1・2・4・6)

江戸時代後半の遺構は第1面で検出した (図8)。調査区北部では中世耕土上面を遺構検出面としたことから、江戸時代前半から後半の遺構を検出している。江戸時代前半の遺構については次節でふれる。SE02付近から南側では、中世耕土と同一レベルにある江戸時代の整地層の上面を遺構検出面としたことから、検出した遺構は江戸時代後半のものである。江戸時代後半の遺構としては建物礎石、石組み井戸、埋甕、土坑等がある。

建物跡 (図11) 建物礎石は面的に広がりをもった状態で検出した。礎石の検出レベルから大きく2時期に分けられる。緑線で復元した建物跡 (以下、建物跡1とする) は礎石天端レベルが概ね12.5mである。青線で復元した建物跡 (以下、建物跡3・建物跡4とする) は礎石天端レベルが概ね12.6mである。また、礎石の検出レベルに差は認められないが、建物跡1とは別の建物を構成するものを赤線で復元した (以下、建物跡2とする)。

建物跡1 (図11) 礎石は扁平な河原石を使用し、単独のものとして2石一組のものがある。検出状況から一間6尺7寸 (約

2m)で、一間半(約3m)ないしその半割りの位置に礎石を配置したとみられる。検出した礎石の並びを現存遺構である坊主町の山中一克家住宅を参考にすれば、南側には座敷を想定できる⁽⁹⁾。座敷は六畳間の三室で構成され、礎石の配置から南側に床もしくは押入れを設けていたと推測できる。座敷には縁側が取り付けられていたとみられるが、これに対応する礎石は検出できていない。屋敷の北側は、現存遺構から推測すると土間になっており、SE02は建物内に設けられた井戸と考えられる。ただし、図7の土層断面には土間とみられる明確な層は確認できていない。SE01と埋甕SK40・SK41を検出した一画が一段凹んでおり、この付近に玄関が想定できる。玄関をこの位置に想定すれば、屋敷地への入口は南北街路に面していたと考えられる。

建物跡2(図11) 建物跡2は建物跡1と礎石の検出レベルに差は認められず、厳密には両者の新旧は不明である。礎石の配置や建物の構造からすれば、両者が全く異なる別棟の建物とは考えられず、部分的に改修を行った結果と考えられる。建物跡1と同様、6尺7寸を一間としている。

建物跡3(図11・12) 建物跡3は建物跡2の西側で検出した。礎石は花崗岩の割石を使用し、一部の柱通には根固めを施している。礎石の配置は他の建物跡と同様、6尺7寸を一間とし配置している。調査区の西側が撓乱を受けており、建物跡の全容は不明であるが、検出した礎石の配置から東西一間半、南北二間半の建物が2棟平行して建てられている。あるいは2棟ではなく、間に間仕切り等を施し、一棟建てであった可能性もあり得る。根固めを伴う礎石があることから、重量を支える柱の存在がうかがえ、建物跡3は蔵である可能性が高い。根固めを伴う礎石は建物の東寄りにあり、西側がやや長い「へ」の字状を呈する屋根形状であったと想定する。検出した位置から建物跡3は土塀をはさんで街路に面していた可能性が高い。検出状況をみる限り、建物跡3は建物跡1と重なるが、建物跡2とは重ならないことから、同時並存したかどうかは措くとして建物跡2を意識して建設された可能性が指摘できよう。以上から、調査地内の建物遺構は、建物跡1→建物跡2→建物跡3の変遷が想定できる。建物跡3の下部からは施釉陶器の小壺が3個出土した。小壺1・2・3は整地層の上に三角形に配置され、1点のみ蓋を伴っていた。検出した位置から建物跡3に伴う地鎮遺構と見られる。

建物跡4(図11) 建物跡1の南側で延石を伴う建物跡を検出した。全容は不明であるが花崗岩の割石を使用した礎石を使用することから建物跡3と同時期である可能性が高く、当該時期の母屋の一部と見られる。次に建物の上限時期を礎石の下位にある土坑から考えたい。

SK50(図11) 建物跡1の座敷下に位置する土坑で、長辺1.67m、短辺1.55m、深さは20cmを測り、埋土上面に礎石が2石存在する。染付皿は口錆装飾を施し、高台は蛇ノ目凹型高台でV期の資料である。播鉢は丹波焼で全面に施釉し高台が付くV類と見られる。これらの遺物から土坑の埋没時期は概ね19世紀前半～後半であろう。

SK108(図11) 建物跡1と建物跡4の礎石の下位に位置する。長方形を呈し、長辺2.3m、短辺1.5m、深さは遺構検出面から25cmを測る。埋土から貝等とともに陶磁器等が出土した。広東碗、青磁鉢、焙烙H類等が出土している。18世紀後半から19世紀前半の様相を呈している。

SE02(図12) 建物内に設置されたと考えられる井戸である。掘方は直径約1.8m、深さは遺構検出面から2.3mを測る。埋土上層には石組みはなく、検出面から1.4m下で3段分の石組みを検出した。石組みの下位は湧水層とみられ、その部分に直径約60cmの曲物もしくは桶を設置していたと考えられる。井戸の掘方上面には礎石が配されているが、掘方内から遺物の出土はなく構築時期を特定できない。埋土からは瀬戸焼の鉢、蛸唐草文を描く染付徳利、染付磁器小杯が出土している。このうち鉢は松肌うのふ釉であり、近代に盛行する遺物である。

瓦の様相(図13) 土坑からは建物に葺かれたと見られる瓦が多く出土した。その中に刻印を持つものが8点確認できた。SK121からは「東池七」の刻印を持つ瓦7の他、6点がまとまって出土した。隣接するSK122からは幕末から近代にかけての遺物とともに凝灰岩を掘り込んだ仏像の未成品6が出土している。瓦はSK121の埋土下層からまとまって出土した。刻印がある瓦は全て丸瓦で、玉縁からやや離れた位置に玉縁側を上にして刻印されている。「東池七」は、現在の姫路市東山に居住した瓦師、池田屋七五郎の刻印である⁽¹⁰⁾。初代は天明二年(1782)に没し、二代目、三代目と続く。三代目池田屋七五郎の代頃から瓦専業となったと言われる。東山にある海久寺には三代目が納めた「天保辰歳」とともに「東池七」の刻印瓦がある⁽¹¹⁾。三代目は万延二年(1861)に没したと伝わる。

これらの刻印は四代目以降のものという可能性もあるが、SK122から出土する遺物の様相から、下っても明治時代までには土坑内に瓦が廃棄されたと考えられる。このことからこの刻印は三代目池田屋七五郎のものとする。なお、SK39から出土した弥七焜炉は三代目の末弟である元東山焼陶工の池田弥七が考案したものである。SK120は近代の廃棄土坑で、8の「神瓦惣」と10の「大古瀬市左衛門」、9は金光教の「八つ波に金の文字」の軒瓦が出土した。「神瓦惣」は姫路城でも確認されているが、瓦師の名は不明である。神崎郡船津町の瓦師によるものであろうか。「大古瀬市左衛門」は御城瓦師である大古瀬氏の刻印である。姫路藩の武家屋敷は、現存遺構の検討からは瓦葺きは少なく萱葺きが多かったとされている⁽¹²⁾。出土した瓦から屋根構造までは言及できないが、少なくとも幕末期以降の建物には現在の姫路市域一円から瓦が供給されていたことが判明した。

建物の時期 これらの刻印瓦は文化年間以降の使用とされる⁽¹³⁾ことから、瓦が葺かれたのは文化年間以降、三代目池田屋七五郎の亡くなる万延二年までの間に位置づけられる。これらの瓦が建物跡1と2に葺かれていた確証はないが、前述した土坑の年代とも大きく矛盾するものではないことから、建物跡1と2については19世紀第1四半期から第2四半期にかけて建築されたと推測する。建物跡3・4は礎石の検出レベルから建物跡1と2とは明確な時期差がうかがえ、近代になってから建築されたと考えられる。

建物に伴う遺構（図8-11～13） 建物に伴う遺構としてSE01、埋甕SK40・SK41、雨落ちSK67がある。SE01の埋土中からは統制陶器等が出土しており、井戸の廃絶は戦後に位置づけられる。SK40とSK41の掘方内には施釉陶器甕4・5が埋られている。いずれも内面に白色の沈着物が見られることから便所甕として使用されたものであろう。SK67は丸瓦を円形に組み合わせたもので、内部には黒色の玉石が充填されていた。東京都汐留遺跡の龍野藩邸跡からも同様の遺構が見つかり、雨落ちと評価されている⁽¹⁴⁾。建物跡1の座敷と想定した位置からは近現代のモルタル敷きの池が検出された。11はその池の水溜めに使用されたとみられる大谷焼の甕である。甕は肩部の刻印から田村窯の製品で、同窯の生産開始は明治43年である⁽¹⁵⁾。底面には意味は不明であるが「タルト」の線刻がある。これらの遺構については江戸時代の建物跡1と2に伴うものではなく、建物跡4として一部確認している近代の建物跡に伴うと考えられる。明確な礎石が検出されていないため建物跡の全容は不明であるが、建物跡1で玄関を想定した部分にあるSE01、座敷下の池、座敷あるいは玄関横の便所遺構SK40とSK41、建物内の雨落ちSK67があるように、江戸時代と近代以降とで建物の配置が大きく変化したといえる。これに対し、SK120・SK121・SK122といった廃棄土坑が掘られていた敷地南部の空間は、遺構を検出する段階で多くの植物の樹痕が検出された。このことから敷地南側は近現代には庭であったことがわかり、建物を建築する場所については、江戸時代の空間構成を踏襲していることがわかる。

茶町の調査（図8） 2区では井戸、土坑を検出した。街路に近い2区-2では町屋の土間に伴う整地層を確認した。中央付近の2区-11からは凝灰岩の切石を使用したSE01を検出した。一辺1mを測り、切石を3段以上積んでいる。埋土は遺構検出面から1.1mまで確認したが、それ以下は安全上の判断から未掘とした。埋土から戦後の遺物が出土した。2区-5のSK01は未掘であるが、掘方が急角度に落ち込むことから井戸の可能性もある。2区-15のSK03からは幕末頃の土瓶・行平塙等が出土した。土坑は調査区外に広がるため大半は未掘であるが、写真とは別個体の破片も出土しており、一軒の町屋の住人だけで消費するには量が多いと思われる。あるいは町名のとおり調査地が茶屋であった可能性を示唆する遺物であろうか。

第4節 江戸時代前半の調査（写真図版1・4～6）

本節の遺構は第1面と第2面で検出した。両面で確認した当該期と考えられる遺構を合成したのが図14である。当該期の武家屋敷地は前章で述べたように街区内の屋敷地が分割されておらず、建物の配置も全く異なっていたと想像できる。建物に伴う礎石等はなく、石列、溝、土坑等を検出した。

石列（図15） 2-SD01の南側で検出した。延長1.9m、幅約60cm、本来は更に東西に延びていたと考えられるが、2-SD02埋土上層のみ凹んでいたため一部が残存したとみられる。性格は明らかではないが屋敷内を区画する築地等の基礎と推測しておく。

2-SD01 (図14・15) 調査区のほぼ中央で検出した。延長8.7m、上幅最大1.96m、深さは遺構検出面から60cmを測る。規模に比して遺物の出土は少ない。手づくね成形の土師器皿12・13が機能時の遺物と考えられる。14は須恵器甕を円形に加工した遺物である。また、東播系須恵器鉢15、須恵器蓋16と外面に格子タタキのある平瓦17が出土しているが、これらは周辺から混入したものであろう。性格も判然としないが、屋敷内を区画する遺構であろうか。溝下部から土坑(2-SD01内SK01)を検出した。平面形は不整形円形を呈し長辺2.6m、短辺1.5mを測る。内部はしまりの弱い砂で埋まっていた。溝底より約1m掘り込んでいるが、本遺構からも遺物が出土していない。

SK08-4(図7・14・15) 第1面の土坑の下部で検出した溝である。東壁土層断面51・52層が埋土である。検出規模で延長2.8m、幅70cm、深さは中世耕土上面から約55cmを測る。全容は不明であるが、前述の2-SD01と平行している。埋土から糸切り土師器皿18と灯明皿19、Ⅱ期の染付瓶20が出土した。明確な時期は決めがたいが、これらの遺物の様相から概ね17世紀半ばには埋没したと考えられる。

2-SP05～2-SP17(図14) SE01の南側で検出した6基のピットである。横3基×縦2基が矩形に配列されるが、縦方向の間隔は約60cmで建物を構成するものではない。主軸は先述の溝状遺構と平行しており、屋敷の区画に伴う遺構と考えられる。遺物が出土していないため時期は不明であるが、SK08-4を含めて江戸時代前半以前に遡りうる遺構は東西方向に展開していると想定される。このことは当該時期の武家地が東西に長い敷地であることと無関係ではないだろう。

具体的に敷地内の空間構成を示す遺構は少ないものの、土坑からは当該期の遺物が出土している。

SK12(図14・16) SK08と2-SD01の中間で検出した、南北に長い土坑である。長辺1.2m、短辺50cm、深さは遺構検出面から15cmを測る。遺物は土坑南側から出土した。糸切り土師器皿21・22、肥前系染付碗23である。

SK16(図14・16) SK12の南、約60cmで検出した東西方向に長い土坑である。長辺2m、幅85cm、深さは遺構検出面から26cmを測る。西側が攪乱を受けているため全容は判然としない。肥前系染付猪口24が出土している。

SK54(図14・16) SE01の東側で検出した南北に長い土坑である。SK39に切られている。平面規模は長辺1.2m、短辺50cm、深さは遺構検出面から25cmを測る。出土遺物は多くないが、備前焼灯明皿25、筒花入れ26を図示した。

SK63(図14・16) 建物跡2の礎石下で検出した土坑である。SE01に切られる。平面形は南北にやや長い円形を呈し、長辺1.75m以上、短辺1.6m、深さは遺構検出面から焼く50cmを測る。埋土から土師器皿27、白磁小杯28、肥前系陶器碗29が出土した。遺物量が少なく時期は決めがたいが、下っても18世紀前半までに位置づけられる遺構である。

SK87(図14・16) 1面目のSK08-4の南側70cmで検出した。西側は攪乱を受けているため全容は不明である。平面規模は長辺1.7m、短辺85cm、深さは遺構検出面から22cmを測る。土坑の上面は1面目の土坑によって削られている。土坑下部から底部糸切りの土師器皿30・31・32、肥前系陶器33が出土した。34は濃緑色で硬陶の緑釉陶器である。底部は削り出しの蛇ノ目高台である。

2-SK01(図14・16) 調査区東部で検出した南北に長い円形を呈す土坑である。平面規模は長辺4.5m、短辺2.72m、深さは遺構検出面から約70cmを測る。2-SD02を切っている。遺物は埋土中から散漫に出土し、小片が多い。備前焼皿35、志野碗36、埴塙37、肥前系陶器鉢38、肥前系陶器皿39が出土した。40・41は陶器片を、42は土師器片を円盤状に加工したものである。これらの遺物から総じて17世紀前半に位置づけられよう。

2-SK27(図14・16) 調査区西部、2-SD01の南側で検出した土坑である。攪乱を受けているため全容は不明である。検出規模で長辺3.1m以上、短辺90cm以上、深さは遺構検出面から70cmである。遺物は埋土中から散漫に出土した。43は口縁部に灯明痕を残す土師器皿、44は底部糸切り土師器皿、45は色絵皿、46は肥前系陶器碗、47は備前焼壺である。

2-SK147(図14・16) 1面目のSK120に切られる土坑である。検出規模で長辺2.15m、短辺1m、深さは遺構検出面から19cmを測る。遺物は埋土中から散漫に出土した。48～50は底部糸切りの土師器皿である。51は肥前系陶器刷毛目碗、52は肥前系染付碗で、Ⅲ期の遺物である。総じて17世紀後半に位置づけられる。

2-SK154(図14) 調査区南部で検出した東西方向に長い円形を呈す土坑である。長辺2.63m、短辺1.8m、深さは遺構検出面から95cmを測る。断面形は逆台形状を呈し、掘方の規模に比して深い。埋土中から散漫に遺物が出土

した。糸切り土師器皿、口錆の白磁碗、京焼風陶器、瓦質火鉢が出土している。概ね18世紀前半に位置づけられる。
2-SK155 (図14) SK154の南側で検出した不整形な土坑である。調査区外に広がるため全容は不明である。検出状況で長辺2.8m以上、短辺2.1m以上、深さは遺構検出面から45cmを測る。土坑は2段に掘り込まれ、遺物はSK154と切り合う上段から比較的まとまって出土した。下段からは遺物の出土はほとんど認められなかった。糸切り土師器皿、肥前系染付碗、肥前系染付皿、肥前系陶器蛸手碗、肥前系陶器刷毛目碗、丹波焼播鉢IV A類が出土しており、総じて18世紀前半に位置づけられる。

2-SK165 (図14・16) SK154の北側で検出した不整形な土坑である。長辺3.5m、短辺1.9m、深さは遺構検出面から8cmと極めて浅い。遺物はまとまった出土ではなく、埋土中から散漫に出土した。肥前系陶器碗53・54、肥前系陶器皿55、肥前系陶器片を円盤状に加工した56・57である。総じて17世紀初頭に位置づけられる。

2-SK208 (図9) 街路際で検出した土坑である。東西に長い円形を呈し、長辺55cm以上、短辺40cm、深さは遺構検出面から約12cmを測る。埋土の色調・土質は地山に近似しており、当初は明確に平面プランを確認しにくい状況であった。土坑内から犬の全身骨格が出土した。背を丸めた状態で埋められていることから、飼い犬を埋葬したと推測される。体高は30cm程と推測される。時期を特定できる遺物の出土はない。

整地層 第1面と第2面で検出した土坑の時期から、第1面と第2面との境界とした整地層(図7・東壁土層断面10層)は、18世紀前半以降に位置づけられる。整地の時期を歴史的な事象とあえて対応させれば、酒井氏入封時の新たな屋敷割り(2軒から3軒に分割)に伴い行われた可能性が考えられる。

茶町の調査 2区からは当該時期に位置づけられる明確な遺構・遺物は確認できなかった。

第5節 江戸時代以前の調査(写真図版1・5)

第2面にあたる地山上面で検出した遺構である。検出した遺構は溝と旧河道である。

2-SD02 (図17・18) 2区-7から1区にかけて検出した北東から南西に調査区を縦断する溝である。検出部の延長は約41m、幅は2.2m、深さは最大で60cmを測る。溝の主軸は概ねN24°Eで飾磨郡の条里方向と近い。埋土は比較的均質な細砂で埋まっている。A-A'断面の観察から1・2層と3・4層の2時期に分けられる。後出する1・2層の溝が深く掘り込まれている。溝が2-SD04と交差する付近より北側では、溝の西肩に杭穴とみられる円形の掘り込みが多数認められた。遺物は埋土下層と地山である砂礫の境界から出土し、埋土上層からはほとんど出土していない。遺物量は規模に比して極めて少なく、ごく近辺で生活が営まれていたようには想像できない。58は青磁碗、60は須恵器碗、61は東播系須恵器鉢の底部、62は須恵器鉢、63は須恵器壺、64・65は備前焼播鉢である。59は備前焼片を円盤状に加工したものである。このうち62・63は奈良時代に位置づけられるもので、周辺から混入したものであろう。58・64・65は15世紀代に位置づけられる遺物で溝の機能時のものと見られる。埋土上層にはほとんど遺物を含まないことから埋没時期を厳密に特定できないが、16世紀代には埋没していたと推測される。溝はB-B'断面で確認できるように街路の下部を横断している。街路と溝との交差角度は約3°であり、街路の設置に際して、前身にあたる溝の存在が意識されていた可能性は十分考えられる。調査区で検出した街路遺構は条里ラインに沿っており、調査区の南約70mの位置で実施した第327次調査でも条里方向の溝が検出されている。こうした前時代の溝の存在が城下町建設時の町割に影響を与えたことがうかがえる。この溝は2区でも検出でき、総社ラインにより建設されたとされる地域にも条里方向の溝が延びていることが判明した。

2-SD03 (図17・18) 1区の北側で検出した旧河道で、2区北部は全域がこの旧河道上に該当する。1区北部で東側から1条の溝が合流するが、この溝の延長は調査区外に延びるため確認できない。溝の規模は調査区外に広がるため不明であるが延長40m以上、幅5m以上、深さは2m以上である。後述する2-SD04との切り合いから埋土9層と13層の境で新旧2時期に分けられる。埋土は褐灰～黒褐色でしまりの強い細砂・シルトが主体である。遺物の出土は少なく、最下層の14層と16層から弥生土器66・67が出土した。口縁部の細片で全体の器形は判然としないが、薄い作りで高杯の口縁部であろう。

2-SD04 (図17・18) 2-SD03を切り、2-SD02に切られる溝である。街路付近で溝は途切れるが、本来は更に南へ続

いていたと考えられる。規模は延長31m、幅45cm、深さは北壁断面で55cmを測る。断面形はやや隅の丸い逆台形を呈す。埋土は2-SD03と共通しており、遺物は全く出土していないが2-SD03とほぼ同時期の遺構と想定される。

第IV章 総括

今回の調査では、江戸時代の武家屋敷地の様相に加え、姫路城下町形成に係る新たな知見を得ることができた。以下、主要な成果を列挙してまとめとする。

1. 江戸時代の街路遺構を検出した。街路は片側溝で、断面観察から少なくとも3回の路面の造り替えが確認できた。検出された路面は18世紀後半以後に位置づけられるが、街路はそれ以前から同じ場所に存在した可能性が高い。
2. 姫路城下町跡における武家屋敷の調査において建物を具体的に復元できる資料を得ることができた。幕末以降近代にかけて建てられた遺構であり、現存する建物との対比から建物構造の類似性を見出した。近代には蔵を建て、井戸や池の位置から江戸時代と建物の配置が変更されていることが判明した。
3. 建物跡の周囲の土坑から刻印瓦が出土した。刻印から幕末期以降の建物に用いられた瓦は現在の姫路市域の各所から供給されていた事実を確認した。
4. 町人地である茶町の調査では、既存建物により攪乱を受けていたが、断面観察によって街路に面して建物、敷地中ほどに井戸、奥に土坑を検出するなど、姫路城下町跡における町屋の構成パターンに則していることを確認した。
5. 第2面で検出した2-SD02の存在から、中世段階に調査地周辺に条里方向の遺構があったことが判明した。この溝と江戸時代の街路とは、わずかな誤差を含むもののほぼ直交しており、これまで歴史地理学的な視点で検討されてきた条里ラインの存在を考古学的に実証する遺構といえる。また、この遺構は茶町まで延びていることから、総社ラインによって形成された町の下層にも条里に沿う遺構が延びていることが判明した。

註

- (1) 堀田浩之 1988「築城プランと基準線」『姫路市史』第14巻 別編姫路城 姫路市
- (2) 青山賢信 1999「武家屋敷・民家」『姫路市史』第15巻下 別編文化財編2
- (3) 橋本政次 1987『播磨考・姫路市町名字考』復刻版 臨川書店
- (4) 姫路市 1996『姫路市史』第11巻上 史料編近世2
- (5) 姫路市埋蔵文化財センター 2017『姫路城跡第354次発掘調査報告書』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第49集
- (6) 第1路面と第3路面については、表層と上層の区別ができないため、合わせて上層とした。
分類については、久野重一郎 1943・1944『道路舗装法上・下巻』養賢堂に基づく。四分法を用い水洗により選別した。
2mm以上を砂利、0.01mm以下を粘土とし、その間を砂とした。
なお、粘土の重量については厳密ではなく水洗により失った重量をこれに換えた。
- (7) 前掲註5
- (8) 前掲註2
- (9) 前掲註2
- (10) 中島千進 1989『発明考古学的研究 姫路名産 弥七こんろ』郷土文化学会
- (11) 有本 隆 1984『播磨の瓦刻銘史 御城瓦師の足跡と系譜』姫路市文化財保護協会
- (12) 前掲註2
- (13) 前掲註11
- (14) 龍野市立歴史文化資料館 1998『龍野藩 江戸屋敷の生活』
- (15) 日下正剛 2007「大谷焼・源内焼」『第2回徳島城下町研究会 四国・淡路の陶磁器一生産と流通Ⅰ』
徳島大学総合科学部歴史研究室・考古フォーラムくらもと

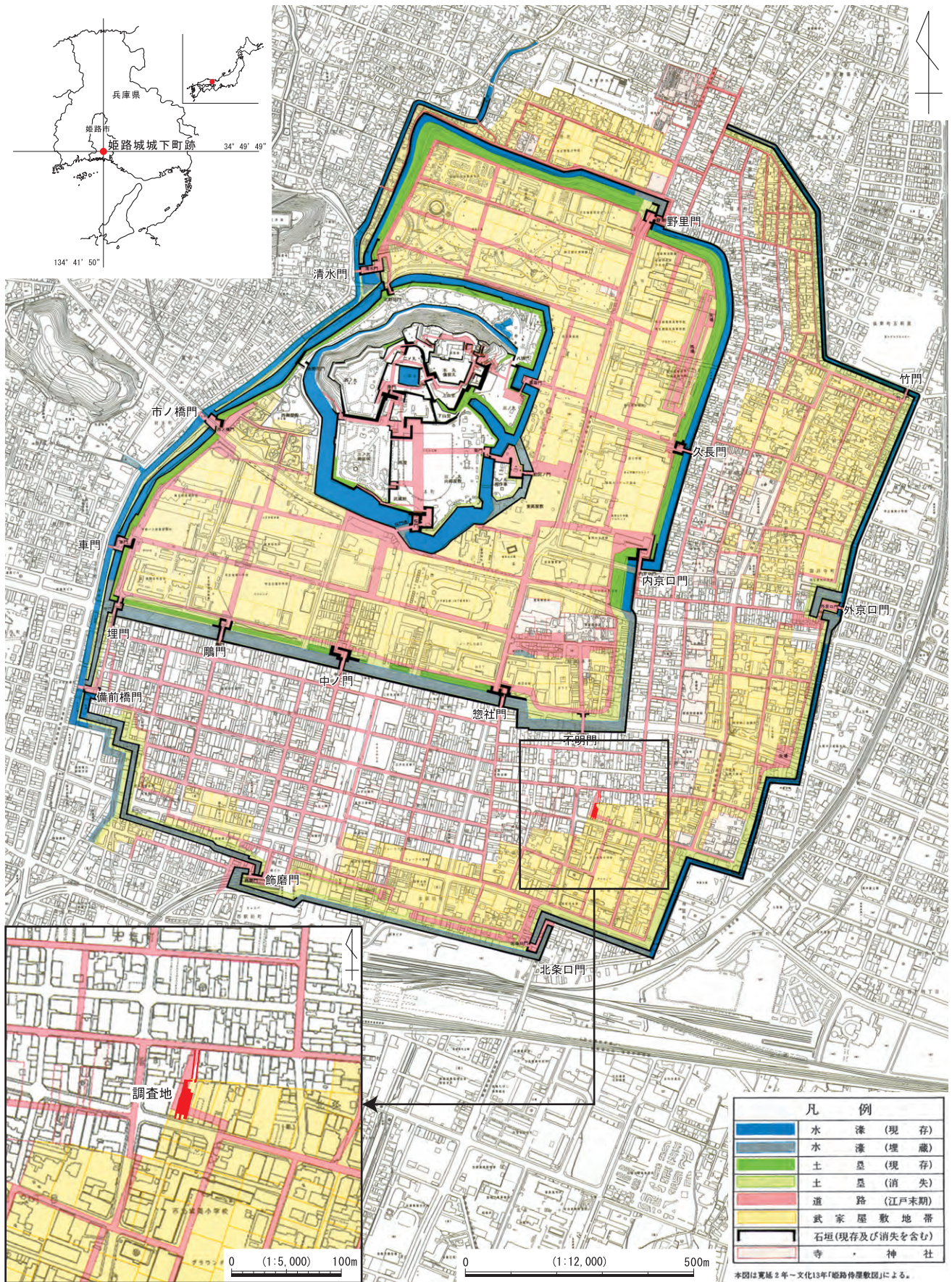


図6 調査位置図

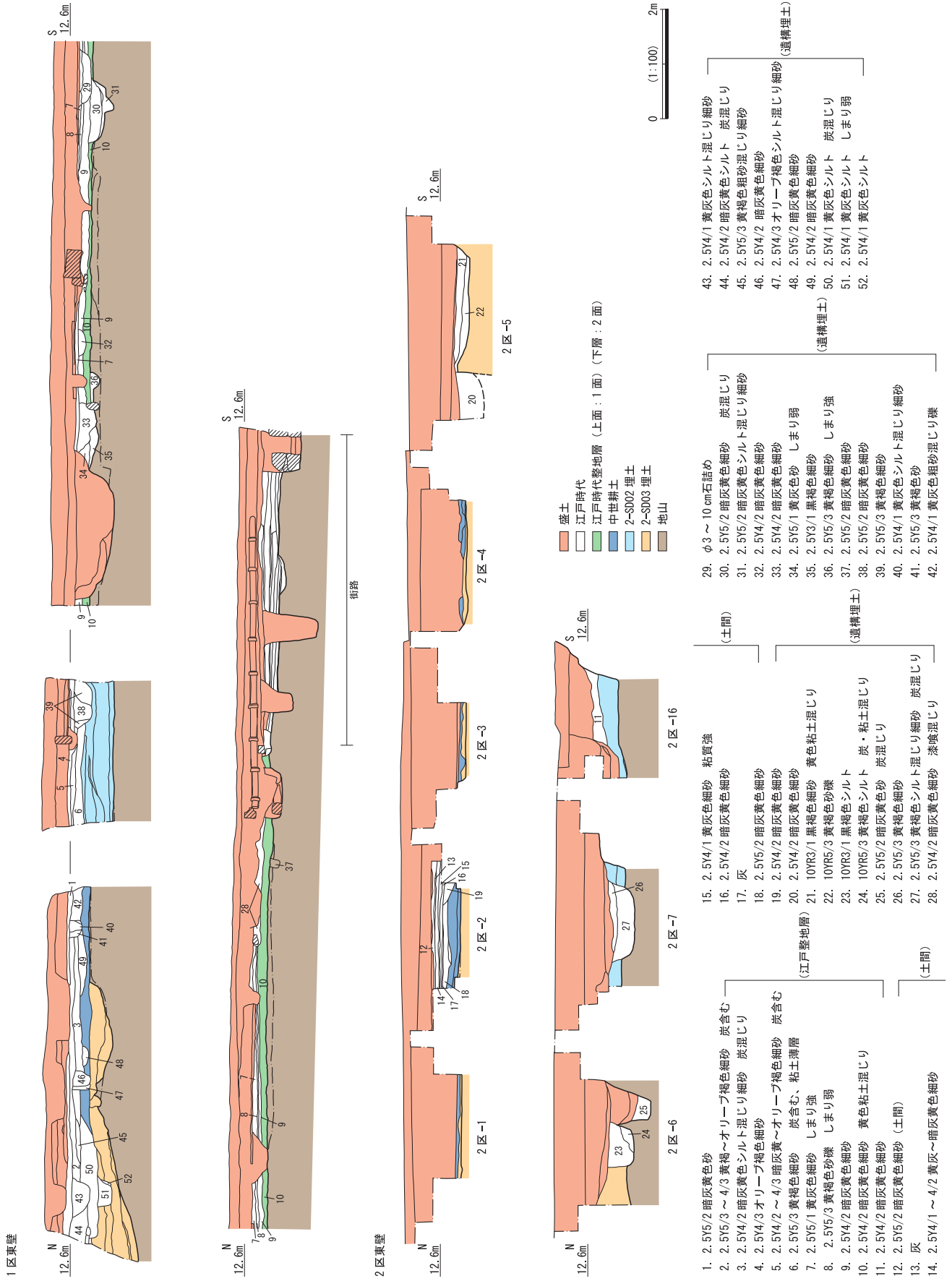


図7 調音区河階断面図

1 区



2 区

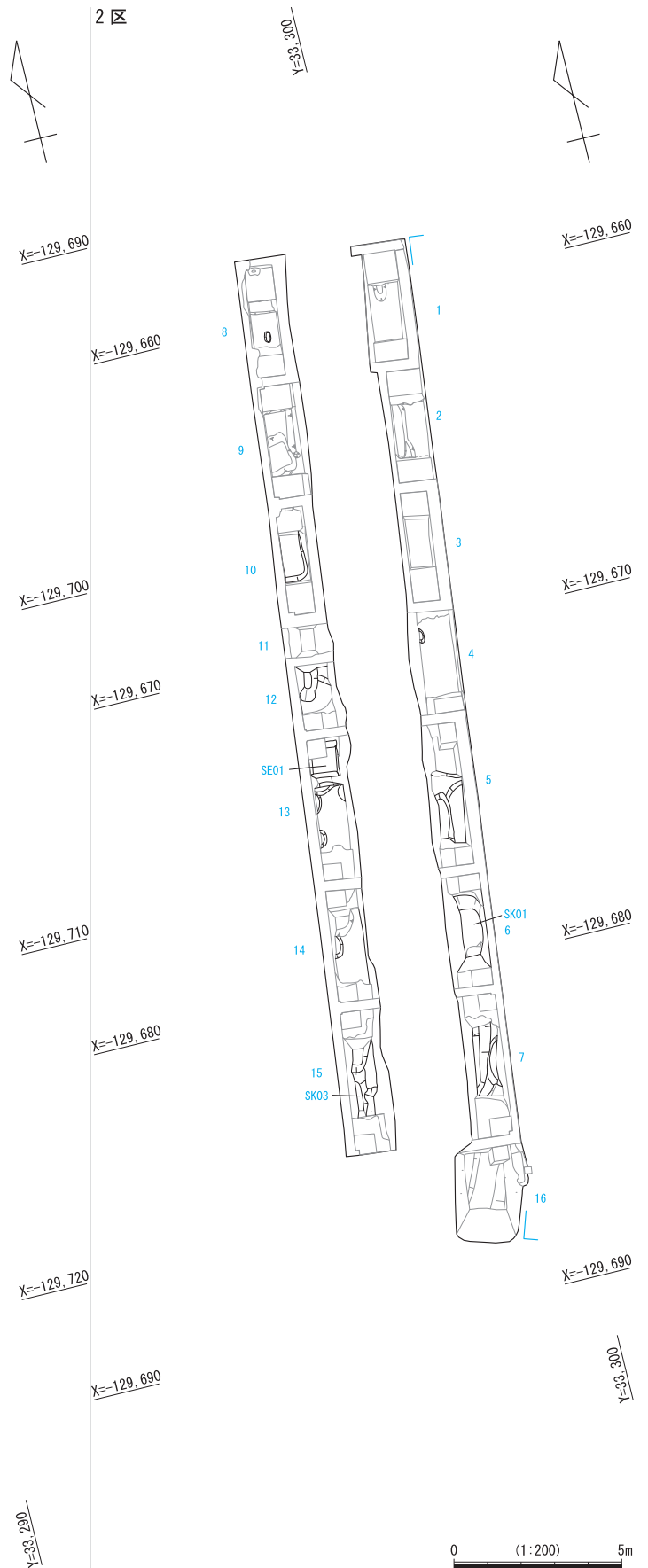
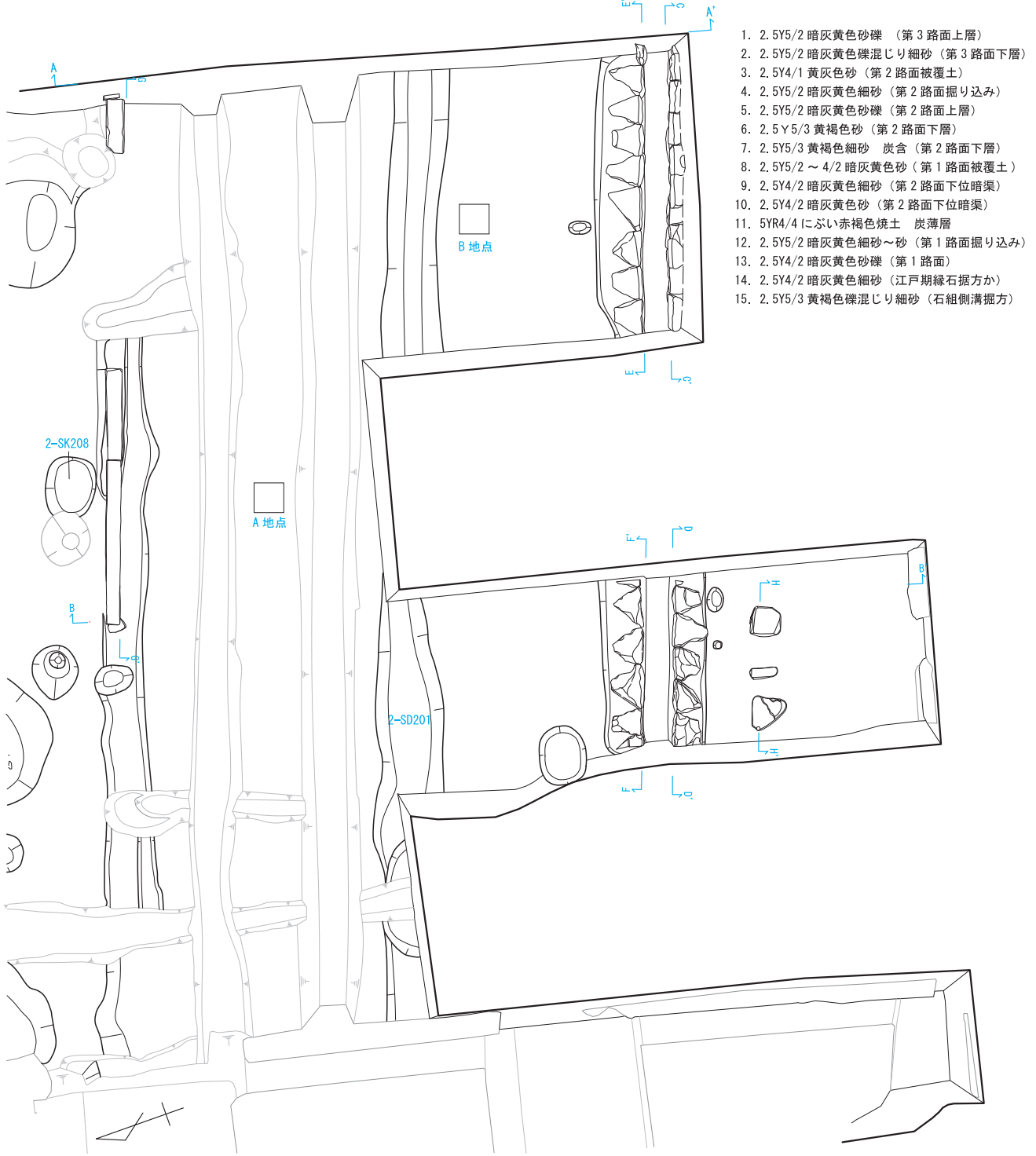
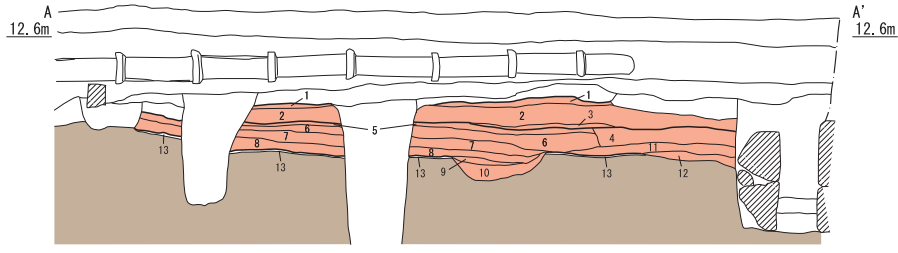


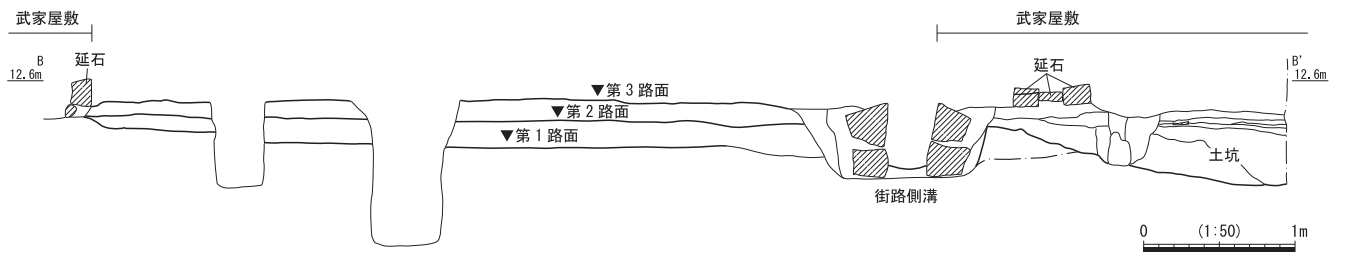
図8 江戸時代後半の遺構平面図



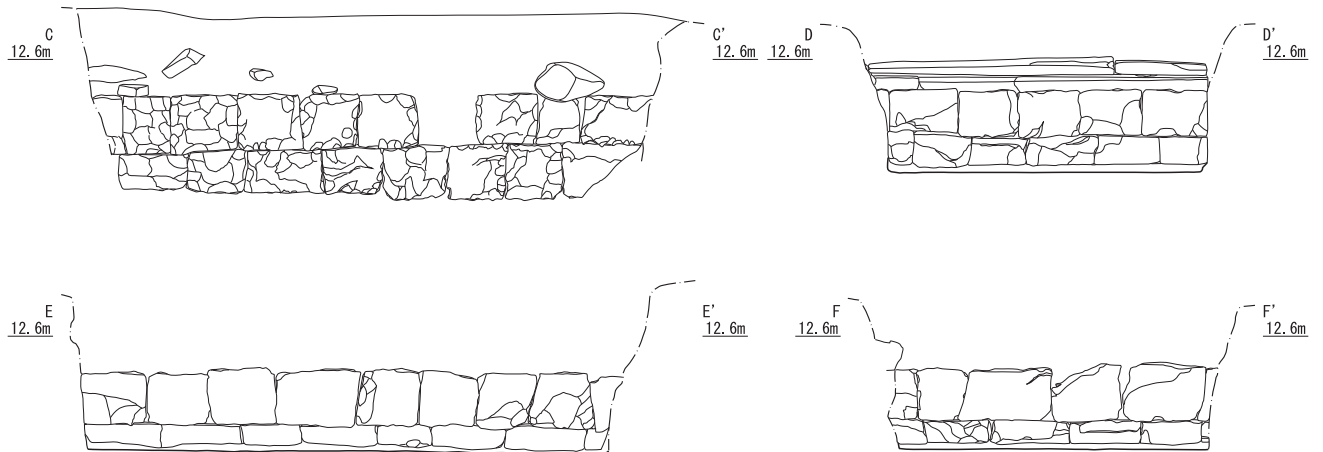
1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫 (第3路面上層)
2. 2.5Y5/2 暗灰黄色礫混じり細砂 (第3路面下層)
3. 2.5Y4/1 黄灰色砂 (第2路面被覆土)
4. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 (第2路面掘り込み)
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂礫 (第2路面上層)
6. 2.5Y5/3 黄褐色細砂 (第2路面下層)
7. 2.5Y5/3 黄褐色細砂 炭含 (第2路面下層)
8. 2.5Y5/2 ~ 4/2 暗灰黄色砂 (第1路面被覆土)
9. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 (第2路面下位暗渠)
10. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂 (第2路面下位暗渠)
11. 5YR4/4 にぶい赤褐色焼土 炭薄層
12. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂~砂 (第1路面掘り込み)
13. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂礫 (第1路面)
14. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 (江戸期緑石掘方か)
15. 2.5Y5/3 黄褐色礫混じり細砂 (石組側溝掘方)

図9 街路平面図・東壁土層断面図

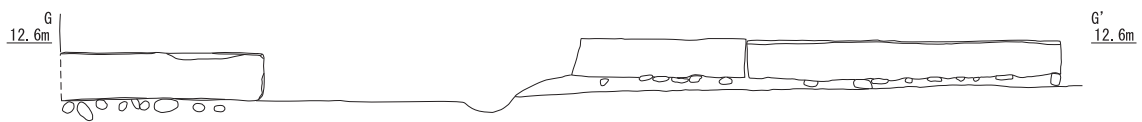
街路標準断面



街路側溝



屋敷境延石



礎石



第2路面出土遺物



第1路面出土遺物

図10 街路関連遺構・路面出土遺物

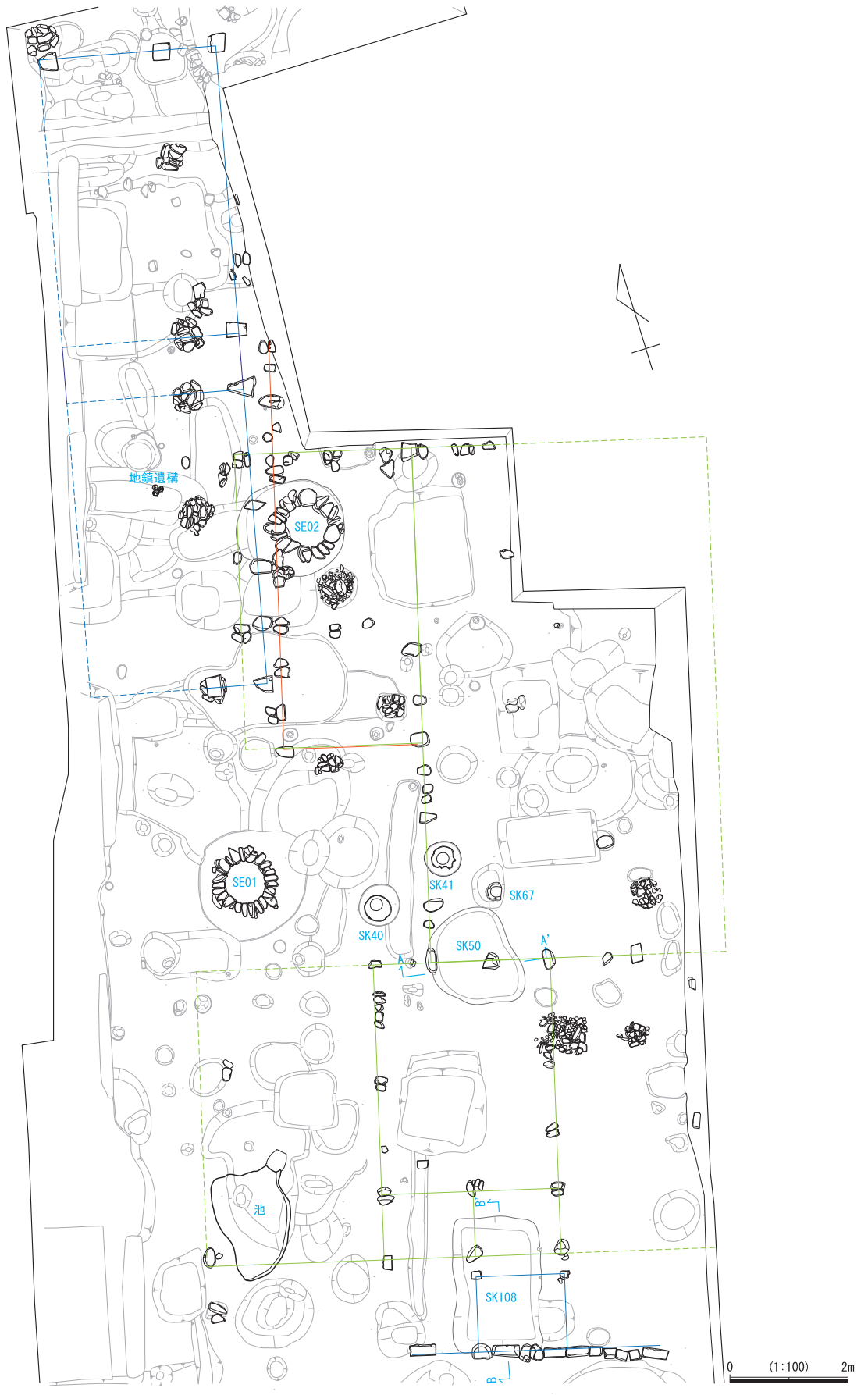
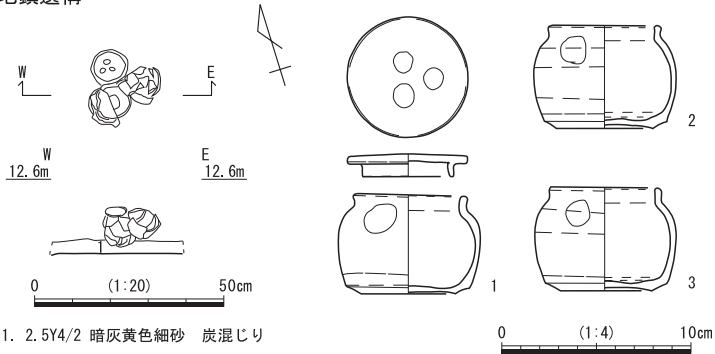


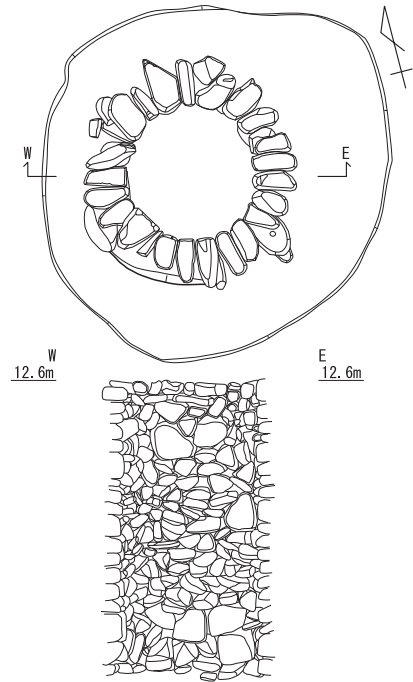
图11 建物礎石配置图

地鎮遺構

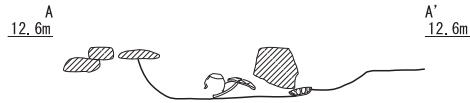


1. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 炭混じり

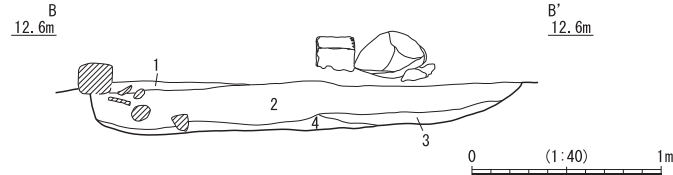
SE01



SK50

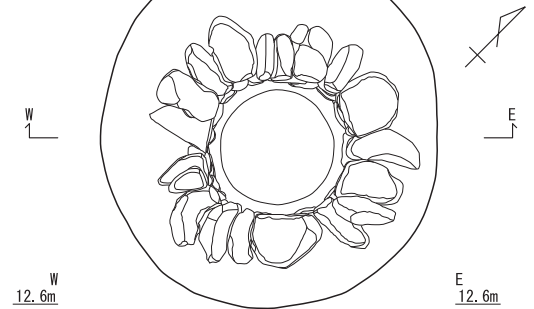


SK108

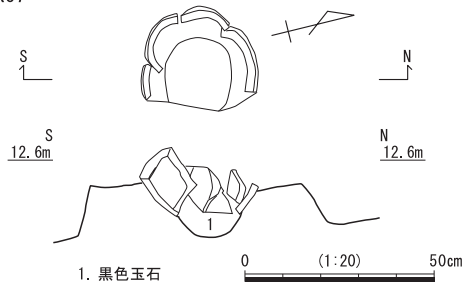


1. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂
2. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂 土器・貝・礫混じり
3. 2.5Y5/1 灰黄色シルト混じり細砂
4. 2.5Y5/1 黄灰色砂混じり細砂

SE02

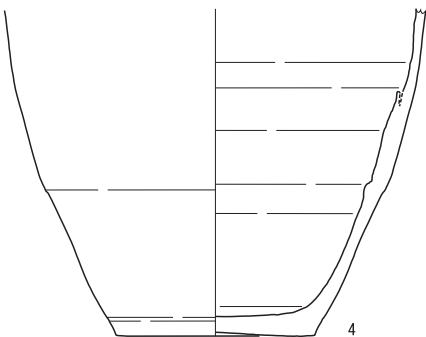


SK67



1. 黒色玉石

SK40



SK41

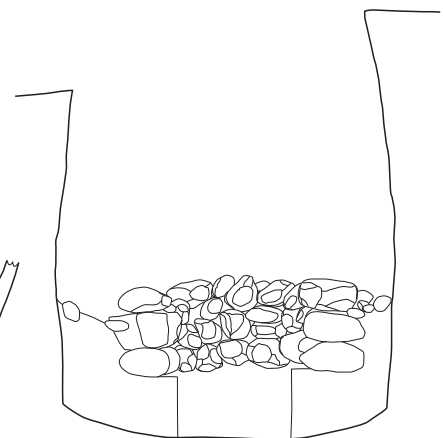
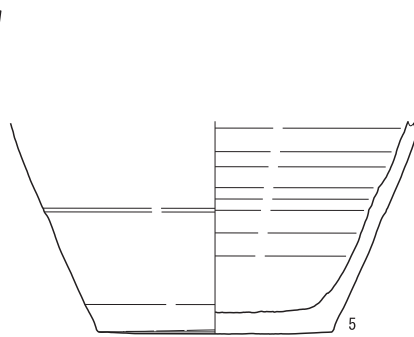
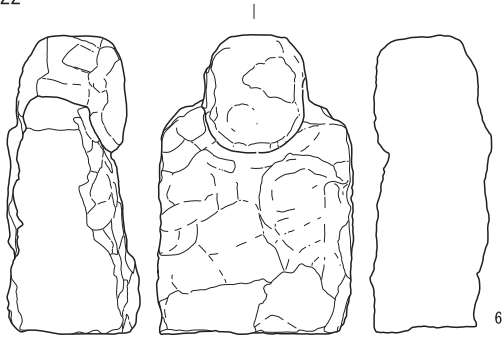
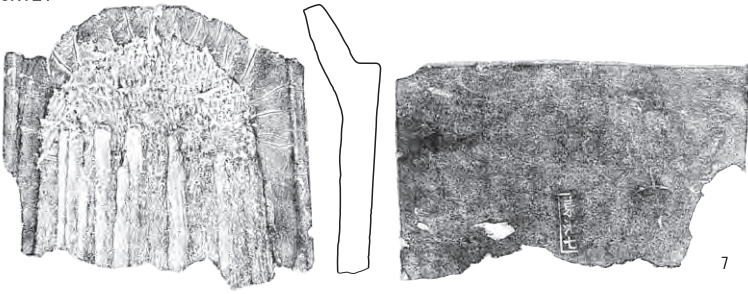


図12 武家屋敷内諸施設

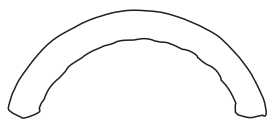
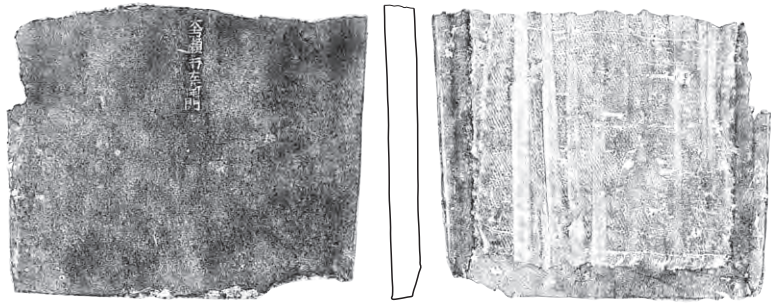
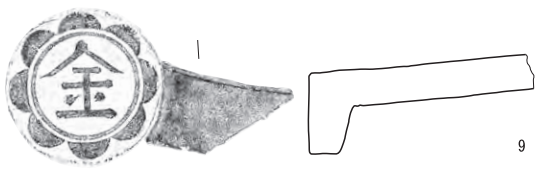
SK122



SK121

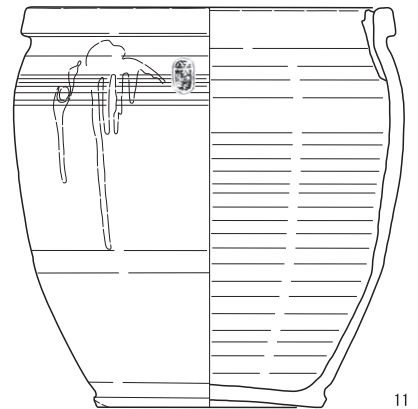


SK120



0 (1:4) 10cm

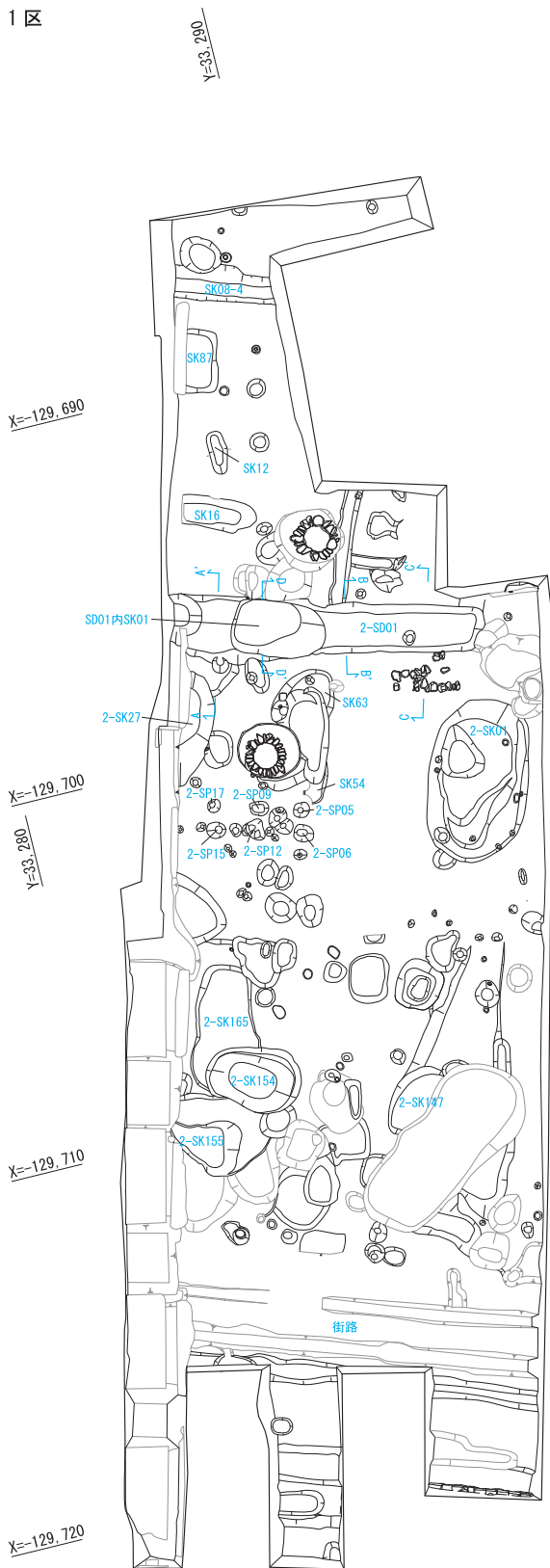
近代池



0 (1:6) 10cm

图13 第1面土坑出土遺物

1区



2区

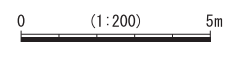
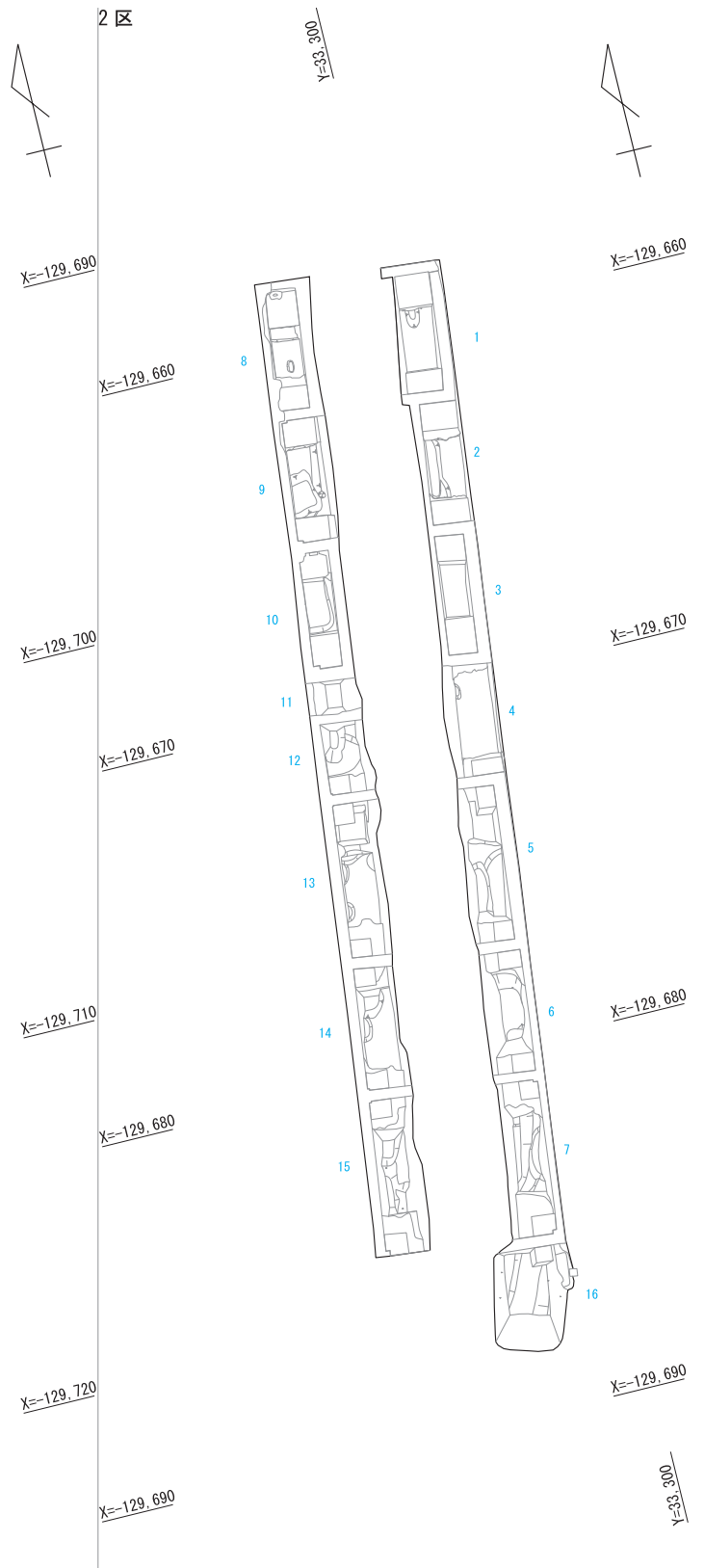
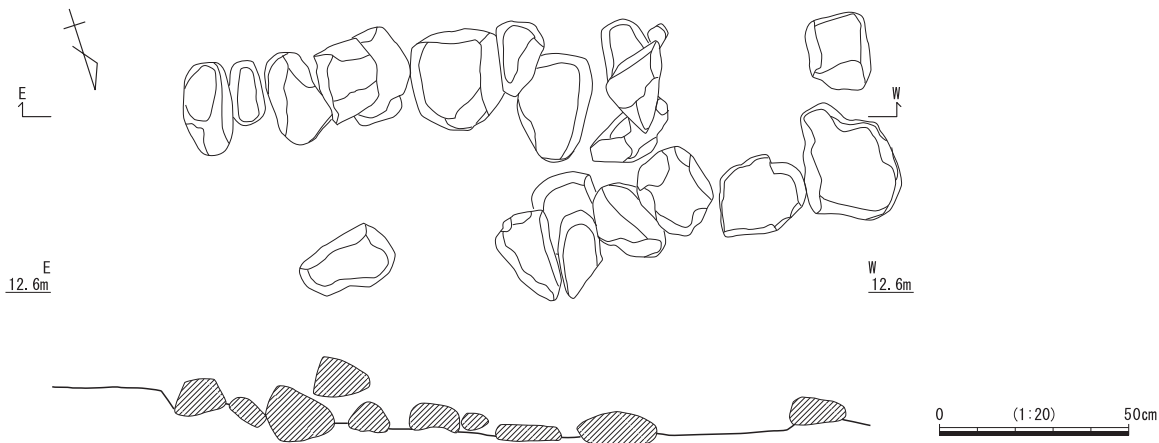
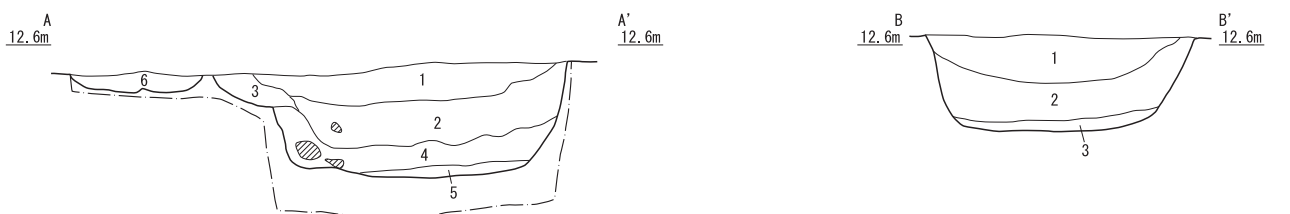


図14 江戸時代前半の遺構平面図

石列

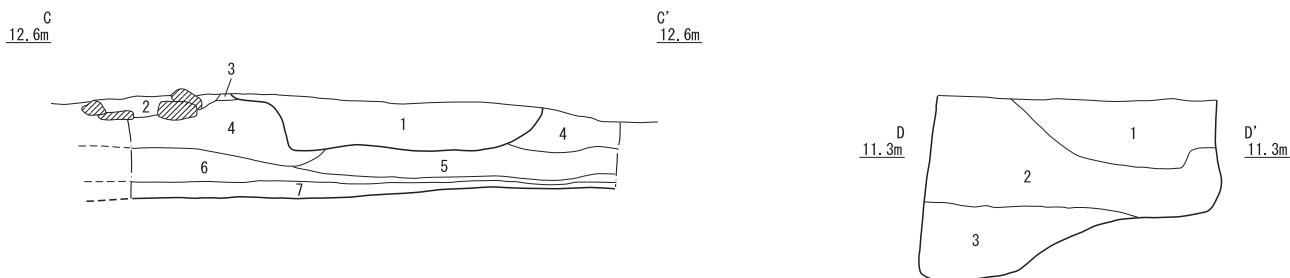


2-SD01



- 1. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂
- 2. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト混じり細砂
- 3. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト混じり細砂 (2層に比べシルト増加)
- 4. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト混じり細砂
- 5. 2.5Y5/4 黄褐色砂
- 6. 2.5Y4/1 黄灰色シルト しまり強

- 1. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂
- 2. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト混じり細砂
- 3. 2.5Y5/4 黄褐色砂

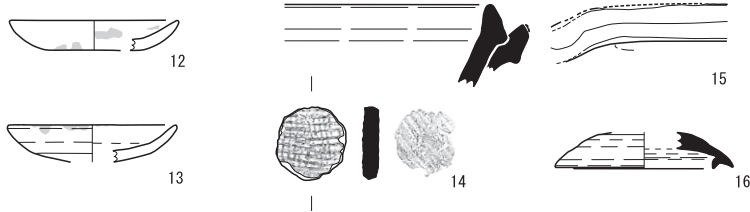


- 1. 10YR5/6 黄褐色シルト
- 2. 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂
- 3. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂
- 4. 2.5Y5/3 黄褐色シルト
- 5. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
- 6. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂 焼土 壁土含む
- 7. 2.5Y5/2 暗灰黄色礫混じり砂

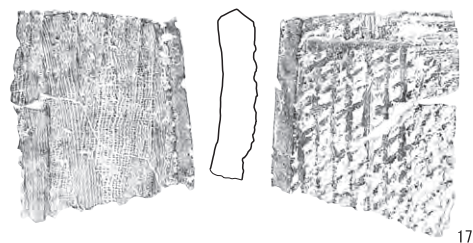
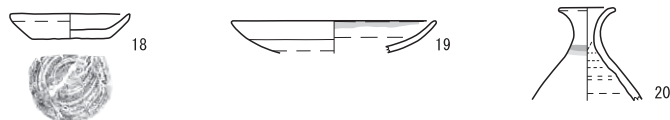
- 1. 2.5Y5/1 黄灰色砂
- 2. 2.5Y5/1 黄灰色砂 しまり弱
- 3. 2.5Y5/3 黄褐色シルト混じり砂 しまり

0 (1:40) 1m

2-SD01



SK08-4



0 (1:4) 10cm

図15 江戸時代前半遺構平面図・断面図、出土遺物実測図

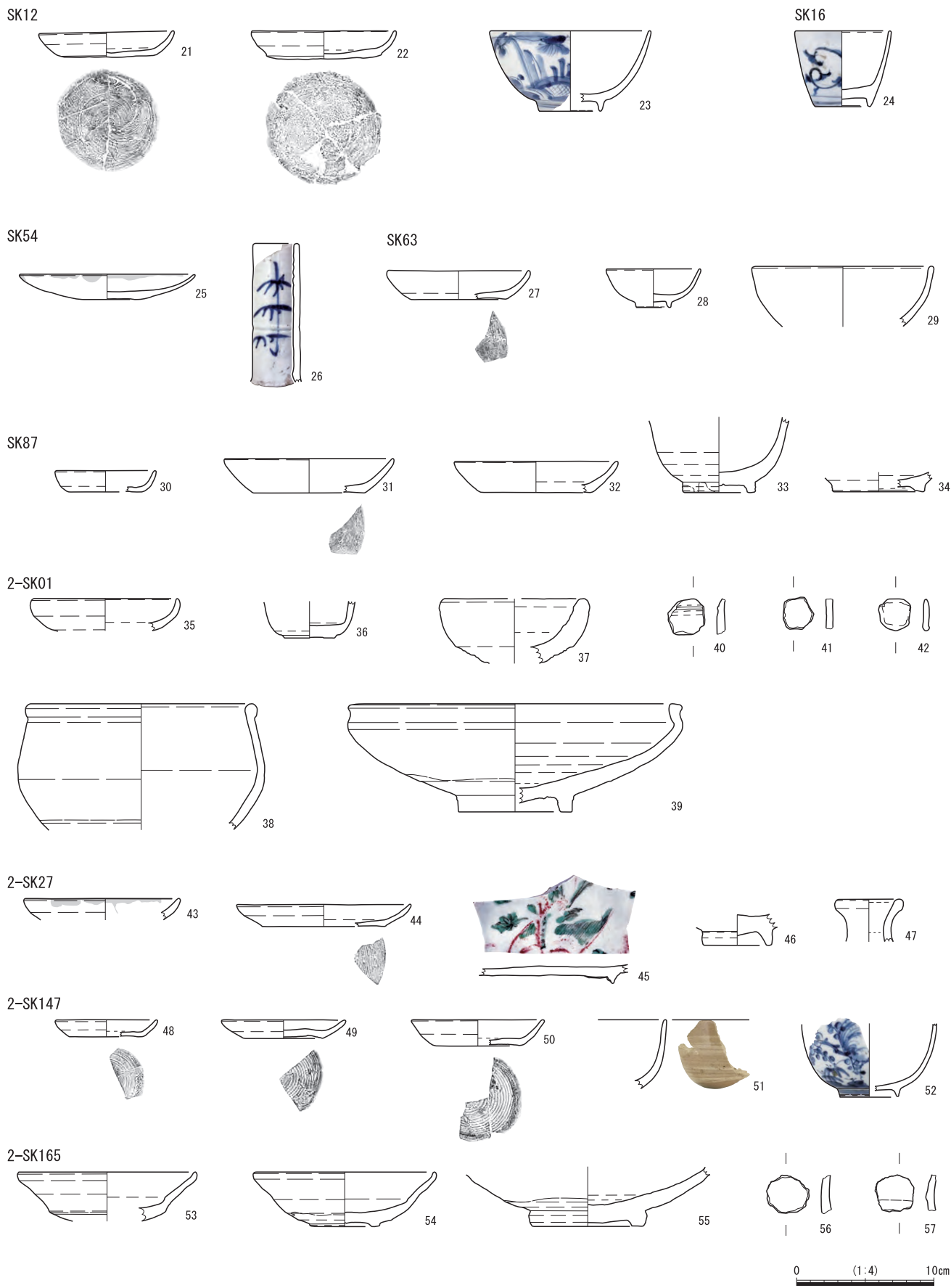


図16 江戸時代前半の遺物

1区



1・2区

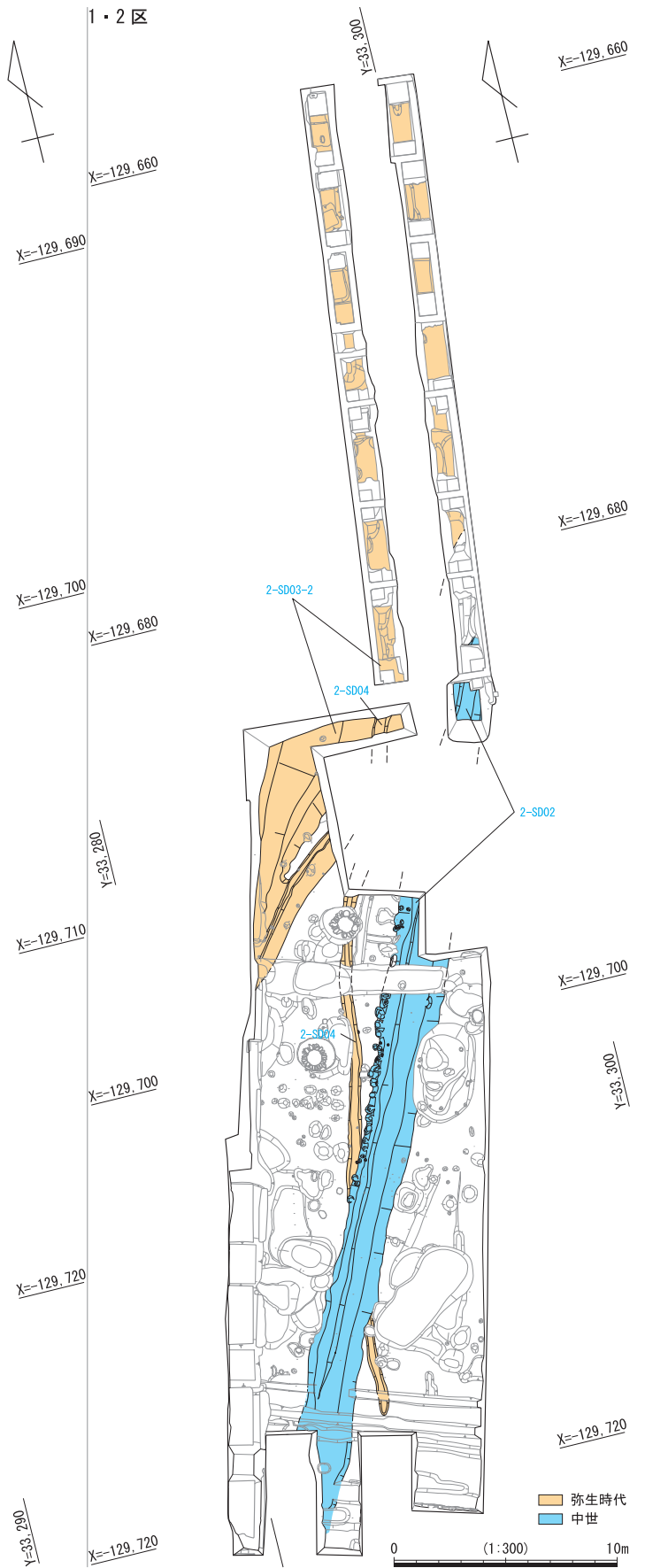
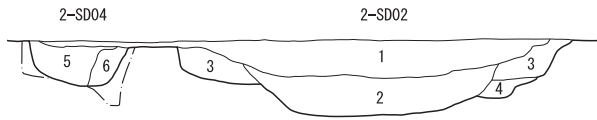


図17 江戸時代以前の遺構平面図

2-SD02

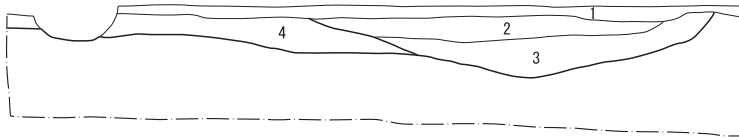
A 12.6m A' 12.6m



1. 2.5Y5/2暗灰黄色細砂
2. 2.5Y5/1黄灰色細砂 下位砂礫
3. 2.5Y4/1黄灰色粗砂混じり細砂
4. 2.5Y5/2暗灰黄色砂礫
5. 2.5Y3/1黒褐色シルト 砂薄層 しまり強
6. 2.5Y5/2暗灰黄色細砂

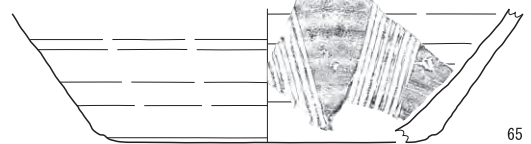
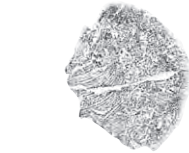
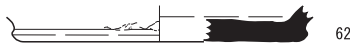
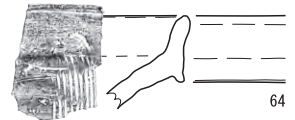
B 12.6m

B' 12.6m



1. 第3路面
2. 2.5Y4/1黄灰色細砂
3. 2.5Y5/2暗灰黄色細砂
4. 2.5Y4/1黄灰色細砂(堆積土)

0 (1:40) 1m

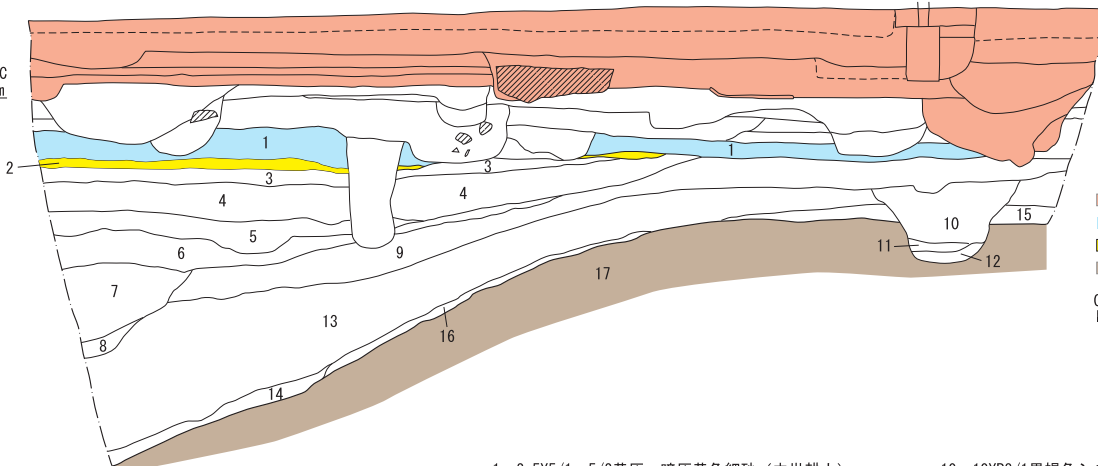


0 (1:4) 10cm

北壁 2-SD03

C 12.6m

C' 12.6m



- 盛土
- 中世耕土
- 床土
- 地山

0 (1:50) 1m

1. 2.5Y5/1~5/2黄灰~暗灰黄色細砂 (中世耕土)
2. 10YR5/4~5/6にぶい黄褐~黄褐色シルト (床土)
3. 10YR3/1黒褐色シルト
4. 10YR5/2灰黄褐色シルト
5. 10YR5/2灰黄褐色細砂
6. 10YR5/2灰黄褐色砂
7. 10YR5/1~5/2褐灰~灰黄褐色砂 しまり弱
8. 10YR4/1褐灰色シルト、10YR5/2灰黄褐色砂混じり
9. 10YR4/1~3/1褐灰~黒褐色シルト
10. 10YR3/1黒褐色シルト (2-SD04)
11. 10YR3/1黒褐色シルト
12. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
13. 10YR3/1黒褐色シルト
14. 10YR6/1褐灰色シルト
15. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
16. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト
17. 10YR5/6黄褐色シルト Mn沈着 (地山)



0 (1:4) 10cm

図18 江戸時代以前の遺構断面図・出土遺物実測図



写真1 第1面調査区 オルソ写真



写真2 第2面調査区 オルソ写真



写真3 調査区から姫路城を望む（南東から）



写真4 1区北部 第1面全景（北から）



写真5 1区南部 第1面全景（北から）



写真6 第3路面 (西から)



写真7 第1路面 (西から)



写真8 第2路面 (北東から)



写真9 路面の重なり (西から)



写真10 第1路面断面 (西から)



写真11 街路と2-SD02 (北から)



写真 12 礎石検出状況 (手前：建物跡 3、億：建物跡 1・2)



写真 13 礎石・SE01・SK40・SK41 (北から)



写真 14 地鎮遺構 (南から)



写真 15 2区 全景 (南から)



写真 16 2区-15 SK03 遺物出土状況 (南東から)



写真 17 1区 2-SK208 犬骨出土状況 (北から)



写真 18 1区北部 2 面目全景 (南から)



写真 19 1区南部 2 面目全景 (北から)



写真 20 2-SD01 (手前: C-C' 断面)



写真 21 2-SD02 (手前: A-A' 断面)



写真 22 SK08-4 (西から)



写真 23 2-SD03 (南から)



地鎮遺構



SE02



SK39



SK50



SK108



SK122



2-SK154



2-SK155



2区-15 SK03

報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと								
書名	姫路城城下町跡								
副書名	姫路城跡第374次発掘調査報告書								
巻次									
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告								
シリーズ番号	第61集								
編著者名	中川 猛								
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター								
所在地	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1								
発行年月日	平成30年(2018年)3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	調査番号
		市町村	遺跡番号						
ひめじじょうじょうかまちあと 姫路城城下町跡	ひめじしこにかいまち 姫路市古二階町 7番	28201	020169	34° 49' 49"	134° 41' 50"	2017.3.7 ～ 2017.6.17	751㎡	集合住宅建設	2016 0542
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構			主な遺物		
姫路城城下町跡	集落跡	弥生時代 中世 近世		旧河道 溝・柱穴 街路、建物跡、井戸、土坑			弥生土器 須恵器・土師器・備前焼 陶磁器・刻印瓦		
要約	<p>武家地と町人地にまたがって調査を行った。武家屋敷内では幕末から近代にかけて建築された建物の礎石を確認し、現存する建物との比較から建物跡の復元を試みた。また、外曲輪における街路遺構を面的に検出した。街路は3回の造り替えが認められ、それぞれの構築時期を特定した。江戸時代以前の遺構面では、弥生時代の旧河道と中世段階の溝を検出した。中世の溝は飾磨郡の条里方向に沿い、江戸時代の街路とほぼ直交している。城下町の建設段階に、先行する遺構を意識して町割りが行なわれたことを具体的に示す資料といえる。今回の調査により姫路城城下町跡に関する新たな知見を多数得ることができた。</p>								

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第61集

姫路城城下町跡

—姫路城跡第374次発掘調査報告書—
平成30年(2018年)3月31日 発行

編 集 姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL(079)252-3950

発 行 姫路市教育委員会
〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本 株式会社デイリー印刷
〒671-0218 兵庫県姫路市飾東町庄57番地2